

故郷

旭中学校3年
柳沢 凜

『日常の中での少しの気づきを行動にうつすことで、いつもの風景にもどしていく事ができる。自分が動くことで、いつもの景色がもっと大切な場所になる。』

学校からの帰宅途中、橋の上から見る川沿いの歩道は、犬の散歩をする人、ジョギングをする人、ボール遊びをしている親子など、いつもの穏やかな景色が広がる。しかし、丈の伸びた草むらには、いたる所にレジ袋に入れられたゴミが点々と捨てられ、何故ここにあるのか、首をかしげてしまうくらい大きなマットやレジカゴなども見えた。

小さい頃、何度も転びながら自転車の練習をした場所。少しこげるようになると、この歩道はどこまで続くのか、ワクワクしながら家族で一緒に行き止まりまでがんばったサイクリング。部活での体力づくりのために、小さくなっていく父の背中を必死に追いかけたジョギング。たくさん思い出の詰まった大好きな道を上から眺めると、こんなにもたくさんのゴミで汚されていた事にショックを受け、とても悲しくなった。

「ひどいゴミだね。何とかしたいね。」

「私もそう思った。」

一緒に帰る友達も同じ事を思っていた。

春休みが終わる数日前、私と友達はお互いゴミ袋を持参し、川沿いの歩道へ向かった。

折れて使えなくなった傘、ビニール袋、たばこの吸いながら入った空き缶やビン、ペットボトル。持ってきたゴミ袋は、あっという間にいっぱいになった。たった一時間、歩道から少し入った草むらの中だけで、こんなにもたくさんのゴミが捨てられている。パンパンにふくらんだゴミ袋をひきずりながら、汗をかいた私と友達の間からは、いつの間にか笑顔も会話もなくなっていた。大好きな場所を汚された悔しさと、自分が普段生活していく中で捨てているゴミが、どこかで環境を汚

してしまっているかもしれないという責任が、ゴミ袋の重みとともに、心にずっしりとのしかかってくる様に感じた。

「みんなが住みやすい、きれいな町づくりをしていこう。」

よく耳にするこの言葉には、どこかほっとする安心感を感じるが、その反面に私は不安を感じる。本来であれば、あたりまえのマナーとルールを一人一人が守ることで、この言葉がスローガンになることはないはずだが、度々とりあげられ、聞き慣れてしまっているのはなぜだろうか。ゴミの分別や、持ち帰りが面倒だから。捨てるのにお金がかかるから。それぞれの言い訳からくる身勝手な行動により、“住みやすい、きれいな町”がいつの間にか目標になってしまっているのではないだろうか。

日本は衛生面できれいな国として注目を浴びている。私達子供が、学校生活で日常的に行っている掃除も、海外の人達からしてみればとても驚くことだ。しかし、祭りなどのイベントの後や、人通りの多い場所では、ゴミが残され、ボランティアや係の人が掃除をしている場面が、テレビなどで流れているのをよく目にする。ゴミで溢れ、汚れてしまった場所は、誰かが気づき、掃除をしないと元通りのきれいな景色にはもどらないのだ。

今、世界ではSDGsの取り組みが広がってきている。その目標の中には、私達の生活の中で出しているゴミそのものを、商品を製造する段階から、減らしていこうとする取り組みも掲げられている。商品を購入した私達は、消費者としてその取り組みを受け継ぎ、さらにゴミの減量を心がけていく必要がある。様々なものの最終消費者として、環境を守っていく責任があるのだ。

私達がゴミ拾いをしている時、通りすがりの人達が、

「ありがとう。」「お疲れ様です。」

こんな言葉をかけてくれた。私と同じように、この景色や歩道を大切に思っている人達がいる、感謝の言葉をかけてくれたことに、あたたかく、優しい気持ちになった。ゴミを拾っている姿を見て、今まで平気で捨てていた人の手が、少しでも止まってくれたらいいと思った。

たった一度だけのゴミ拾いでも、多くの事を学び、自分自身の行動を振り返るきっかけになった。私の中でも分かった事がいくつかある。一つは、公共の場がいつもきれいに保たれているのは、知らないところで誰かが掃除をしているということ。人によって汚された場所は、人によってきれいにされていることを、見えていなくても忘れてはいけない。

もう一つは、一人一人が意識して行動しなければ、環境汚染防止もきれいな町・国づくりも実現することはないということだ。

大好きな景色、大切な場所。この尾張旭が私の故郷になっていくとき、今と変わらずきれいなまちだと全ての人が誇れる、そんなまちであり続けてほしいと私は願う。